

# 糸の井

## 太子町糸井

いろいろの木この葉は 流ながる糸いとの井いは

ゆききの人ひとの しるしとぞ聞きく

ここ太子町たいしちやう、糸井山いといやまの北きたふもとに、縦横たてよこ二

メートルばかりの泉いずみがあります。

あまり深ふかくはありませんが、きよらかなこ

とこの上うえなく、今いままでに水みずがきれたことがあ

りません。

「播磨鑑はりまかがみ」という書物しょもつに、「朝日山あさひやま、顕実げんじ

上人しょうにん、現水うつみず」と伝えています。

その近くに、朝日山寺あさひやまでらが建たてられたころ、この村むらに、一人ひとりの信仰しんこう深いおばあさんが住すんでいました。

「ありがたいことじゃ。」

「お近くちかに仏さまほとけを拜おがませてもらえる。」

と喜よろこんだのも無理むりがありません。このおばあさんのおてつぎ寺でらは、飾磨しつかま(姫路市ひめじし)阿成村あなせむらの松林寺しょうりんじで、その門徒もんとでありました。

年老としおいて、不自由ふじゆうな足あしを、遠とおく離はなれた寺てらまで運はこぶのは、大たいへんな苦勞くろうであります。

「松林寺しょうりんじの門徒もんとをやめさせてください。」

ある日ひ、ことう頼たのんで帰かえりました。

「やれやれ、なんまんだぶつ！」

寢床ねどこに横よこになったところ、うつらうつら眠ねむ

ったかと思（おも）う間（ま）もなく、はっと目（め）がさめました。ぐっしよりと汗（あせ）が額（ひたい）をぬらしています。

「あーあ。」

ため息（いき）をもらし、そのうち、またうとうと夢枕（ゆめまくら）。なにかの影（かげ）が浮（う）んだようで消（き）え去（さ）ります。声（こゑ）もない。汗（あせ）は前（まえ）にも増（ま）して背（せ）中（なか）までびっしより。

「ごごーっ」

大きな地響（ぢびび）きをたてて、朝日山（あさひやま）がおばあさんの家（いえ）へ崩（くず）れ落ち（お）ちました。はっと目（め）を開（ひら）き、思（おも）わず念（ねん）仏（ぶつ）。

「南無阿弥陀仏」



すると、不思議（ふしぎ）や、汗（あせ）がすーっと引（ひ）き、目（め）にちらついていた姿（すがた）も消（き）えました。

「ほとけ 仏さまじゃ。」

「あらもったいなや。」

自分（じぶん）のお寺（てら）を捨（す）てたことをわびました。先祖（せんぞ）以来（いらい）の門徒（もんた）を自分（じぶん）勝手（かた）にかえたことを済（す）まなく思（おも）い、

「こうしては、おれぬわ。」

と、つぶやき、夜（よる）の明（あ）けぬうちにと阿成（あなせ）の寺（てら）で急（いそ）ぎ、前（まえ）にいったことばを取（と）り消（け）しました。

今（いま）、糸井（いとゐ）という村（むら）に、このおばあさんの子孫（しそん）にあたる人（ひと）たちが三十戸（こ）ばかり、松林（しょうりん）寺（てら）門徒（もんた）としてあります。

「さてもありがた仏（ほとけ）の慈悲（じひ）よ。」

と、みんなすこやかに感謝（かんしゃ）の生活（せいかつ）をしておられるとかいうことです。